

1995年1月17日、午前5時46分・・・あれから早くも30年が経過いたしました。今の街並みを見ればあんなことがあったとは誰も想像もできないでしょう。私的には震度7の振れ体験、指定避難所である小学校の講堂での寒い一夜、その後ライフラインの復活（ガス、水道、下水管等）までに3ヶ月、通勤手段の阪急電車の開通までに6ヶ月の生活を余儀なくされました。さらにその後の問題として5棟で構成されたマンション自体倒壊は免れたものの外壁の亀裂や棟間渡り廊下の下落などの被害があり、市当局の判定は「半壊」。棟によって被害状況には差があり、建て替えるか修復するのかで大いにもめました・・・結局は修復と耐震補強で行くと決まるまでに5年かかるなど体験させられました。

その後も、東北、熊本、能登半島などの大震災、近くでは大震災とは言えないかも知れませんが大阪北部の震度5弱の地震など、今年に入っても1月13日に日向灘（M6.9）で津波警報発令、1月23日福島（M5.0）5弱など地震が続いています。日向灘地震と予想される南海トラフ地震とは直接関係はないと判断されましたが・・・今後30年間に発生する確率は80%に上方修正されました。

「備えあれば憂いなし」・・・気象庁も地震は何時・何処で起るかは予知不能とのこと。お互い普段の生活の中で対策だけはとっておきましょう。因みにマンションライフで一番問題となったのは「水」でした。以下、例によって気象の話から始めます。

1. 今年の冬期の気象の経過状況と見通し

1-1. これまでの天候経過

冬型の気圧配置が強まった時期には近畿日本海側を中心に雪や雨が降り、荒れた天気となった所もありましたが、低気圧の影響を受けにくく高気圧に覆われた時期もあったため、近畿太平洋側を中心に晴れた日が多くなりました。このため、近畿日本海側の降水量と降雪量、近畿太平洋側の降水量はいずれも平年を下回りました。また、日照時間は平年を大きく上回りました。

12月の中頃以降には寒気の影響を受けやすかった時期があり、気温は平年を下回りました。

1-2. 今年の神戸の冬季のお天気

前報に引き続き住居近くの神戸気象台の冬期の気温の経過状況を右に挙げておきます。気象庁の予報通り12月中旬以降1月中旬までは平年より若干低い気温おなりましたが、下旬には平年を上回る日が多くなって来ています。一方降雨量に関しては相変わらず12月は0.5mm（平年48.7mm）と極端に少なく、1月も24.5mm（平年48.4mm）と少雨の状況が続いています。

期間	12月上旬	中旬	下旬	1月上旬	中旬	下旬
平年	10.3	8.5	7.6	6.6	6.2	5.7
2023年度	10.1	7.3	6.4	7.3	8.9	3.9
2024年度	10.9	11.0	7.4	7.6	7.8	6.6
2025年度	10.7	7.7	7.5	6.0	6.7	7.3

1-3. 近畿地区の3ヶ月予報（大阪管区気象台1月21日発表、2月1ヶ月間は31日に修正された。）

・全球的には地球温暖化の影響を受け大気全体の温度は高い。やまたラニーニャに近い現象は弱まる。

・上空の偏西風は期間の前半は日本付近でやや南に蛇行するが、後半は平年と同じ位置を流れる。アリューシャン低気圧は平年より弱い、期間の前半はシベリア高気圧の南下により気温は低くなる。期間の後半を中心に北・東・西日本では寒気の影響をうけにくい。西日本と沖縄・奄美では、南からの湿った空気が流れ込みにくい、低気圧や前線の影響を受けにくいでしょう。

・上記の予想から近畿地区の向こう3か月の気温は、期の始めは寒気の影響を受け低目となるが、以降は影響にくい、高いでしょう。

・向こう3か月の降水量は、低気圧や前線の影響を受けにくい、平年並か少ないでしょう。

*近畿太平洋側の2～4月の天気予報

上記の状況から2月以降4月までの近畿地域の各月の予報は以下のように発表されています。

・**2月**：向こう1か月の気温は、期間の前半に寒気の影響を受けやすいため、平年並か低いでしょう。特に、期間の前半は気温がかなり低くなる見込みです。また、期間のはじめは気温の変動が大きいでしょう。 気温：平年並みか低い 低40、並40、高20% 降水量：少ない 少40、並30、多30%

・**3月**：近畿日本海側では、天気は数日の周期で変わりますが、寒気の影響を受けにくい、平年に比べ曇りや雨または雪の日が少ないでしょう。近畿太平洋側では、天気は数日の周期で変わりますが、低気圧や前線の影響を受けにくい、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

気温：高い見込み 低20、並30、高50% 降水量：少ない 少40、並40、多20%

・**4月**：近畿日本海側では、天気は数日の周期で変わります。近畿太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

気温：平年並みか高い 低20、並40、高40% 降水量：少ない 少40、並30、多30%

以上、気象絡みの記述からはじまりましたが、既に沖縄地区では桜の開花が始まっています。また気象会社の今年のサクラ開花予想なども発表されていますので、これ等を含め記述してゆきます。

2. ウメ（白梅）の開花

気象庁の「生物季節観測」の項目には春期の桜以外にウメの開花日が継続観測されて来ています。昨年度は暖冬であった為、各地とも開花が早く松山の12月20日を筆頭に、1月に入って静岡、東京に続き九州や四国の各観測地が続き1月中の開花地点は30以上となりました。因みに、近畿のトップは奈良で1月15日、続いて神戸の1月19日、和歌山1月30日、大阪2月2日、京都2月14日という結果でした。一方今年も1月7日沖縄（平年比6日早い）、17日石垣島（平年比6日遅い）、20日松山（平年比15日遅い）、22日宮崎（平年並み）、27日静岡（平年比10日遅れ）29日東京（平年比7日遅れ）の開花が発表されています。沖縄を除き本州は気温の影響で何処も開花が遅れて来ているようです。

近所歩きで見かけるウメも紅梅は可成り蕾も膨らんでいるように思われますが白梅はまだまだと思えます。なお、ウメに先駆け「蠟梅」の方は観察地としている高塚公園（西宮市の蠟梅植樹公園）での開花は見られませんが、附近のご家庭の庭では数か所開花が見られます。

3. 「カンヒザクラ」の開花

奄美・沖縄地区の気象庁・生物季節観測のサクラ基準樹種としては**カンヒザクラ**が選ばれているが、下記4ヶ所での開花が報告されています。

・沖縄・那覇 開花日1月5日、平年より11日早く、 昨年比も8日早い。

- ・宮古島 開花日 1月 6日、平年より 11日早い、昨年よりは 1日遅い。
- ・名瀬（奄美）開花日 1月 21日、平年より 1日遅い、また昨年より 4日遅い
- ・石垣島 開花日 1月 22日 平年より 4日遅い、昨年と同じ。
- ・沖縄・奄美地区の 12月の気温は平年より若干低目で以前は、この地域のヒカンザクラの開花は、北から南と言われていましたが最近は順不同。ただ、今年はこの地域の気温も 1~2月は平年並みか若干低目に推移するとの予報であり、満開も記録されると思われます。

4. 今年のサクラ（ソメイヨシノ）の開花予想

日本気象株式会社は、1月9日に2025年第1回目のサクラの開花・満開予想を発表後、1月23日に第2回目の開花予想を出していますが第1回目と殆ど変わっていません。

・西日本の今シーズンは10月から11月にかけては平年よりかなり高め、12月は平年並みの気温でした。10月から11月にかけての高温の影響で休眠打破の時期は1週間程度遅くなる見込みです。1月は平年並みか平年より高め、2月から3月にかけては平年より高めの気温が予想されています。よって開花時期は平年並みとなるでしょうということです。

因みに、大阪は3月28日、京都3月27日、和歌山3月26日の開花が予想されています。

・個人的には、この付近では11月下旬以降平年を下回るか平年並みの気温が続いているので、昨年のような「休眠打破」の遅れはないと思っています。2月、3月の気温次第でしょうが、前述の気象庁の予報では2、3月の気温は平年以上に高くなるとの予報ですので、開花も平年よりは若干早めになるのではとないかと思っています。

5. 一本のソメイヨシノの樹（成木）に花は何個ぐらい咲くのでしょうか？

ソメイヨシノなど桜の開花日は、気象庁は観測基準木で5、6輪が咲いた日と定められています。基準木全体で何輪咲く内の5、6輪なののでしょうか？通常、観測には若木や老木、枝切りの多い樹などは選ばれず、庭園などに植えられ、枝払いの少ない成木が選ばれているようですが。

では、胸高直径が35~40cm、殆ど枝払い（刈り込み）を受けていないソメイヨシノの成木では何個ぐらいの花をつけるのでしょうか？

A. 5000個ぐらい、B. 10,000個ぐらい、C. 50,000個ぐらい、D. 10数万個はつける、

・多分多くの方は B ぐらいかなと思われるのではないのでしょうか？逆に、Dなんて在り得ないではないでしょうか。

*この設問は、昨年西宮市が開講した宮水学園・マスター講座の「植物はすごい~植物の不思議と魅力を知ろう~」の講義の中で講師である田中修先生が出題されたもの。正答は D なのです。私自身も多くてもCぐらい、Dなどは？でした。

*最近定例の散策の途上で、右の写真のように庭師さんがサクラの高枝に梯子をかけ垣根から出た枝を剪定しているのに出くわしました。



切り枝はゴミ扱いなので特に目的があったわけではないが一枝を貰って帰りました。持ち帰った枝は、右の画像のように長さ 60 cm ほど、枝の基部をノギスで測定したところ 1.00 cm でした。上方には、枝が 8 本、冬芽は花芽が各々の枝に 6~9 個、合計 60 個、葉芽が 10 個ついていることが分かりました。

この枝の芽の数を基に樹に付く花の数を推定することが出来ます。樹木の幹と枝との間には

「分岐前の茎の断面積 = 分岐後の茎の断面積の総計」

という関係が成り立つことが知られています。(既に紹介している*植物形態学・福岡教育大学の講義録・茎の部分をお読み下さい。)

この関係を基に、直径 3.5 cm のソメイヨシノの成木に花がいくつ付くかを算出して見ます。

右の枝は基部で 1.0 cm ですから、断面積は $1 \times 1 \times (\pi / 4)$ cm^2 、一方幹の断面積は $3.5 \times 3.5 \times (\pi / 4)$ cm^2 となるので、この樹には計算上は直径 1 cm の枝は 1225 本あることとなります。樹の成長過程で枯れ落ちる枝もあるでしょうから、1000 本と仮定。

1 本の枝に上記の実測値より低く花芽は 50 個つくと考え、この樹の花芽の総数は 50×1000 、5 万個となります。通常一つの花芽からは 3~4 個の花が咲くので花の数は 15 万~個。正答は D であることが理解頂けるでしょうか？

開花日とはこの内、5、6 輪が開花した日となるわけです。



6. ツバキ科の花—2

6-1. シロバナユキツバキ

この付近では野生種であるヤブツバキも少数ではあるが見られますが、右のようにまだ蓄硬しの状況です。また、水不足の影響か、葉も黄色を帯びています。



前報で触れた「山茶花」は開花も終盤ですが、散策路で白花、一重の花を付けた小木に出会いました。季節柄、サザンカ的一种であろうとおもったのですが・・・合弁花であり「ツバキ」の仲間と分かりました。

右下の写真でもわかるように、落花から合弁花であることからツ

バキ系であり、葯の下の花糸が黄色でありヤブツバキ系(花糸が白色)ではなく、花が平開することと合わせ「ユキツバキ」系であることが分かります。自生種は白花ではなく紅色系ですのでこれは園芸種「白花ユキツバキ」と思われます。



6-2. 熱帯産のツバキ ハイドゥン (*Camellia amplexicaulis*)

ツバキ科の樹木は本来は熱帯・亜熱帯の樹木、温帯の日本に自生するのはむしろ例外であると記述しました。ご承知のように、日本に自生するツバキは「ヤブツバキ」と日本海側の多雪地帯に分布する「ユキツバキ」、ユキツバキとヤブツバキの交雑種である「ユキバタツバキ」と屋久島以南に分布する「ヤクシマツバキ (リンゴツバキ)」の4種とされています。現在では、これ等の原種を使って500を超える園芸品種が創出されています。

日頃の散策路ではありませんが、先日の班別行動日に訪れた、鶴見緑地公園内の温室「咲くやこの花」館の熱帯雨林室で、右のようなツバキ科の花が一輪咲いているのに出くわしました。

同館のHPには下記の記述がありましたので紹介しておきます。

旧正月の人気者 *Camellia amplexicaulis*

ベトナム北部の亜熱帯の樹林下などの暗い場所に生えるツバキの仲間です。花は桃紅色、6弁以上で半八重に見えます。新葉が展開する時は銅色を帯び、その後濃い緑になります。日本には珍しいツバキとして1990年代後半に導入されましたが、寒さにやや弱く関西では室内栽培となります。ベトナムでの hai duong の名を日本の音にしてハイドゥンと呼ばれます。ベトナムのテト (旧正月、1月下旬～2月初旬で年により変わる) にはこの花が使われるそうです。

・花は12月中旬から1月初旬まで順に咲いていくでしょう。とのことでツバキ類は熱帯にも分布することがわかります。ただ、開花はこの1輪のみ、紅色の蕾が多数見られ今年には花期が遅れているのでは？



7. ビワの開花

日頃の散策の途上で1月半を過ぎたところに、2ヶ所で右のようなビワの開花に出くわした。特に珍しい花ではないが問題は花期。科が実施している11月の箕面公開観察会では毎年箕面の川筋で開花が見られており・・晩秋に咲くので媒介する昆虫 (主としてハエ) も少ないので花の時期が長い・・などと説明してきたが今年には異常に遅い開花ではないでしょうか。文献では「花芽は主に春枝の先端に着く。花芽は純正花芽。花期は晩秋から冬 (11 - 2月) で、甘い芳香がある地味な白い5弁の花を群がりつける。花径は1 cmほどで、クリーム色を帯びた白い花弁は、茶色の短い軟毛が密に生えた萼片に包まれていて、開花のときは花弁を外側に出す。葯には毛が密に生えている。長期の花期に多量の花密を蓄え、甘い芳香を放って昆虫または小鳥が来るのを待ち、花粉の媒介が行なわれる」などの記載はあるが、この地域での開花は今期は大幅に遅れているように思います。



なお、ビワは中国南西部 (・湖北省) の原産で、日本には古代に持ち込まれたと考えられており、主に本州の関東地方・東海地方の沿岸、石川県以西の日本海側、四国、九州北部に自然分布するとされます。

8. ユリオプスデージー

近くの商業・医療センター中庭や民家の前庭で花の少ないこの季節に右のような黄金色の花をつけている低木が見られます。レンズでの検索結果は、南アフリカを原産とするキク科ユリオプス属の常緑低木、ユリオプス・ペクチナータス (*Euryops pectinatus*) であり、「ユリオプスデージー」の品種名で植木として市販されていることを知りました。晩秋から春まで、黄色い花を長期間咲かせます。葉や茎に細毛が生えているので、全体が灰白色に見えます。花期は10月～4月ですが、条件がよければ真夏以外も開花するとのこと。



・ 薄い銀色がのる切れこみの入った葉をもち、黄色の花を長期間咲かせ、株が大きくなると茎が木質化してさらに大きくなります。とても丈夫で、薄い銀葉と長期間咲く花も美しく、一般の庭や公園など多くの場所で見られるようになって来ています。寒さに弱いといわれていますが、南関東以西の暖地では特に保護しなくても冬越しします。とのことで、皆さまの周りでもご覧になれるのではないのでしょうか。

9. 加温テストの途中経過

2020年から「サクラ」の芽の「休眠打破」の有無を見る手段として、2月初旬頃に枝を採取し室内に生けて、開花や展葉の有無を調べて来ました。昨年末にSさんから「マルバノキ」の挙動・・・花芽は年内に開花し頂芽(葉芽)は開かない・・・冬芽なのかとのご質問。また以前に、クヌギや早咲きのカワズザクラ?の冬芽などは11月頃から成長してくるとの報告もあり、今年は、この加温テストを年末から開始しています。手法・テスト対象樹種の詳細は昨年度の「花だよりー18」に記載の通りです。

その後、変化の少ない冬芽だけでは寂しいので早咲きの梅、サンシュウ、ヤマブキの枝を加えています。また、室内では日中湿度が下がり芽が乾燥脱落する恐れもあるので、全体をビニール袋で覆っています。

本テストの開始は昨年12月25日ですので、1月14日で一応20日間が経ちました。昼夜の室温の平均を20℃とすれば、4000℃・Dayの加温となり、1月24日で30日、6000℃・Dayの加温となりましたので、変化の様子などまとめておきます。

①ソメイヨシノの枝

既報の様に20日間の加温では、花芽を含む枝、葉芽だけの枝共全く変化は見られませんでした。さらに30日の加温でも全く変化は認められていません。

②ロウバイ

本種については、葉芽はともかく花芽は早期に開花するのでは?とテストを始めたのですが予想に反して途中までは若干花芽が大きくなって来たのは認められたのですが、その後7~8個あった花芽全てが脱落してしまいました。本種は水揚げが良くないのかなと思っています。日頃の散策途上ではこの附近でも2,3ヶ所で開花が見られるようになって来ていますが、1月30日、Tさんから自宅の庭で10年前に実生した樹を育てており、既に右のように開花しているとのご便り、写真拝借しました。



③ コナラ

・この枝の採取時には、樹にはまだハハソモミジの残っていた状況でした。20日間の加温では、下の写真のように頂芽（葉芽？）は動いていません、変化の見られたのは頂生側芽でどうやら「花芽」のようです。この後、下の画像のように25日の加温で花穂が若干伸びはしたものの30日には花芽が枯れる？という現象が見られました。多分養分不足となった為ではないかと思っています。葉芽と思われる頂芽には変化はなく枯れた？花芽を取り去り頂芽の変化を見て行くようにしています。



上記の写真は→は20日加温、25日加温のもの。30日、花芽成長無く枯れる。花芽撤去。

④ アベマキ

前報では20日間の加温で頂芽が変化したことをお知らせしました。頂生測芽や、側芽（多分花芽と思いますが）若干芽の先が変形したかな？の程度でした。その後加温テストを続けて観ると頂芽は日ごとに成長し、展葉が見られ5、6枚の葉が現れました。ただ、展葉後、一部葉の成長がありましたが、他の葉の成長は見られず、枯れるような様子であったので撤去、花芽の変化をみて行く方針です。



テスト前

1月14日の画像

1月19日の画像

1月24日の画像

加温20日目に変化が見られ、25日で葉の葉脈が見られるので展葉の評価は2、30日目では芽鱗が脱落、1枚の葉は成長するが他は萎れました。恐らく、桜切り枝テスト時と同様、養分不足の為と思われます。25日目で側芽(恐らく花芽)にも変化はみられますが、頂芽を取り去った以降も養分不足であれば開花には至らないかも知れません。

*コナラは花芽の展開が先行、アベマキは逆に頂芽の展開が先行、自然の生き様を観てゆく方針です。

⑤アカメガシワの展葉

アカメガシワはご存じの通り、裸芽の代表でどこでも見られる樹種です。冬芽は殆どの樹では頂芽のみで側芽は殆どみられません。今回の加温テストでは20日間では殆ど変化は見られなかったのですが、25日目に目には写真のように展葉し、30日目にははっきりと葉の形が認識できるまでに展葉しました。



試験前の冬芽



加温 25 日目の展葉



加温 30 日目の展葉

・アカメガシワは順次開葉樹の代表のように見られています。確かに春~夏にかけての観察会などでは次々に名の通り表面に赤色の毛の生えた新葉が展開してくる様が観察できます。一方では、葉柄は下方の葉ほど長く枝全体の葉に日光が当たるように配置します。順次開葉であるから始めから下方の葉の葉柄を長くして開葉？或いは展葉後に葉柄が伸びる？・・・このような現象は上記の開葉の様子から解けます。春先の冬芽からの展葉は一斉開葉であり、イチョウなどの開葉と同様、下の葉ほど葉柄を長く開くと考えればこの謎は解けるはずです。実際の樹木で春先の開葉の様子を観察下さい。

⑥マンサクの枝の加温テスト

元々、この加温テスト自体はSさんからのマルバノキ（ベニマンサク）の花は晩秋~初冬に咲くが、葉芽は展開せず「冬芽」でしょうか？とのお問い合わせから始めたものである。マルバノキ自体は植物園などでは見られるが切り枝などのご法度。代替に近所の公園で手に入る同じ科のマンサクで調べて見ることとした。図鑑上では花芽も葉芽も「冬芽」と記載されてはいますが...（山溪・機に咲く花）。

20日間の加温では、花芽の先から黄色が覗いた程度、下の写真は→以降、25日目3輪開花、30日目12輪が開花、この時点で花を除去。一番右は33日目、葉芽1個が展開しました。開花・展葉に一定期間の冷温期は不要のようです。勿論、採取した公園の樹の花芽・葉芽には変化はありません。 以上

